

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 6 年度病虫害発生予報第 3 号 (6 月) について

このことについて、病虫害発生予報第 3 号を発表したので送付します。

予報第 3 号

農薬は、周辺環境に気をつけ、安全かつ適正に使用しましょう！

福岡県では、農薬の使用機会の多い 6 月から 8 月を「農薬安全使用運動」の実施期間にしています。農薬を使用する際は、以下の点に気を付けてください。また、P10 の注意事項も参考にしてください。

- ① 購入・使用の際、ラベルを確認する。
農薬を使用する前には、必ずラベルを確認し、正しく農薬を使いましょう。
- ② 農薬の使用状況を記録する。
使用の際、農薬名・使用月日・希釈倍数等を正確に記録し、保管しましょう。
- ③ 農薬の飛散防止に気をつける。
風向きや強さに気をつけ、周囲への飛散防止に努めましょう。
- ④ 散布器具はきちんと洗浄する。
タンクだけでなくホースの中にも農薬が残っていることがあるので、しっかりと通水洗浄しましょう。排水が川や水路に流れ込まないようにしましょう。

【参考情報】

- ・農薬に関する諸情報「農林水産省／農薬コーナー」<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>
- ・農薬の適用内容の確認「農薬登録情報提供システム」(独立行政法人農林水産消費安全技術センター)
<http://pesticide.maff.go.jp>

6 月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	現況 (発生量)	6 月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病 ミカンハダニ	並 少	並 少	並 やや少
なし	黒星病 ハダニ類	並 やや少	やや多 やや少	並 やや少

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	6月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かき	炭疽病	並	並	並
	フジコナカイガラムシ	並	並	並
	ハマキムシ類	並	並	並
果樹共通	果樹カメムシ類	—	多* (前年比)	
茶	炭疽病	多	多	多
	もち病	少	少	並
	カンザワハダニ	やや少	やや少	やや少
	チャノコカクモンハマキ	並	並	並
	チャノキイロアザミウマ	並	並	並
	チャトゲコナジラミ	並	並	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多	やや多

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

* 果樹共通・チャバネアオカメムシの予報は前年比としています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①

○X（旧Twitter）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

Xの本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②



<予想される向こう1か月の天候（令和6年6月1日～令和6年6月30日）>

向こう1か月の気温はほぼ平年並ですが、期間のはじめは冷涼な空気に覆われやすいため、かなり低くなる見込みです。

前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多いですが、日照時間は、ほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低30 並40 高30% ほぼ平年並の見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少30 並30 多40% ほぼ平年並の見込み

（福岡管区气象台 令和6年5月30日発表1か月予報より抜粋）

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査では、調査定点11か所中1か所で多発（発病葉率21.7%）したが、他定点では発生量は平年より少なかった（±）。
※右記グラフ及び下記数値は、多発ほ場を除いた10地点発病葉率平均値です。

発病葉率 0.03%（平年 0.26%、前年 0.30%）

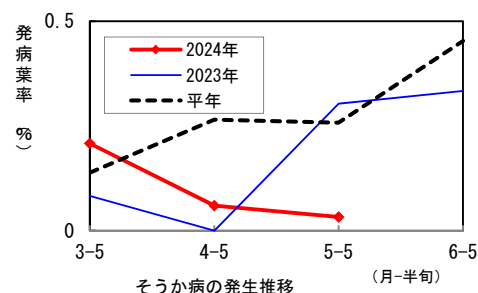
発生ほ場率 18.2%（平年 15.4%、前年 18.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉は園外に持ち出し、幼果期の防除を徹底する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p10の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発生葉率 0.2%（平年 5.6%、前年 1.3%）

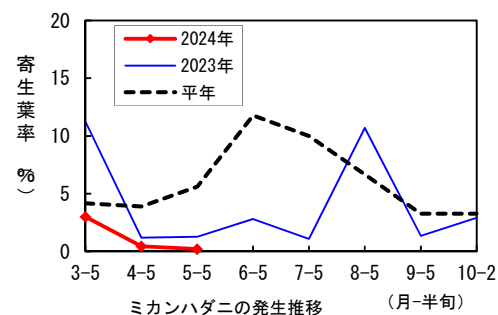
発生ほ場率 18.2%（平年 44.2%、前年 54.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉率 2.0%（平年 1.3%、前年 2.0%）

発生ほ場率 83.3%（平年 61.2%、前年 81.8%）

発病果率 1.2%（平年 2.2%、前年 1.5%）

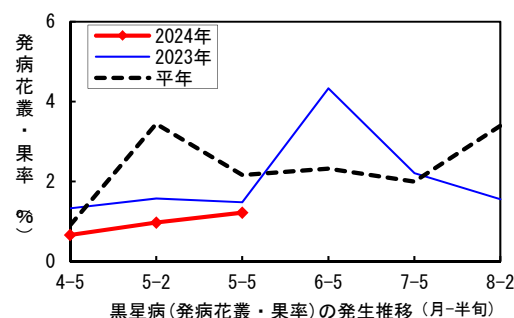
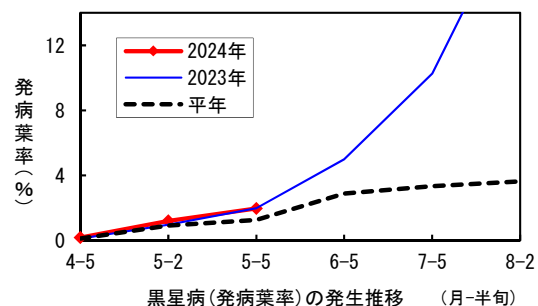
発生ほ場率 75.0%（平年 51.3%、前年 63.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布



を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI 剤、QoI 剤、SDHI 剤、AP（アズリルピリジソン）剤については、同一系統剤の使用回数を年間で2回以内にとどめる。

これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。

エ 「幸水」の果実は開花60日後以降、再び感染しやすくなるため、果実への感染防止に努める。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

寄生葉率 0%（平年 0.3%、前年 0.5%）

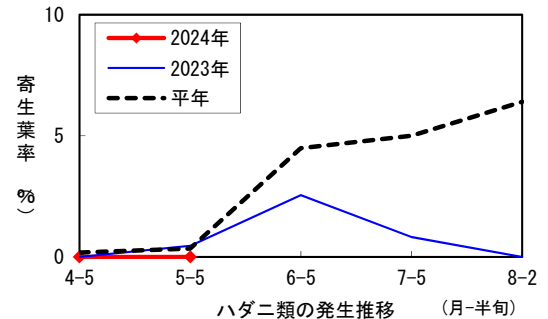
発生ほ場率 0%（平年 19.5%、前年 9.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

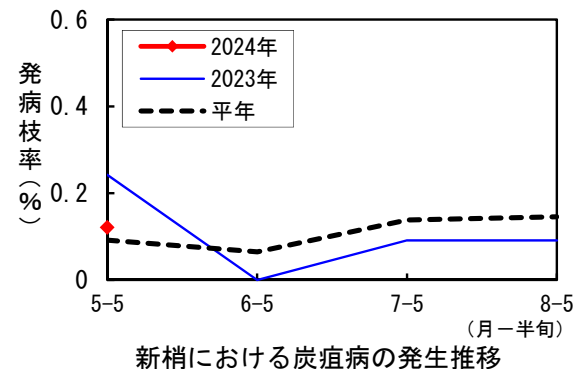
発病枝率 0.12%（平年 0.09%、前年 0.24%）

発生ほ場率 18.2%（平年 12.4%、前年 18.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発生枝率 0.6%（平年 0.8%、前年 0.03%）

発生ほ場率 9.1%（平年 32.5%、前年 9.1%）

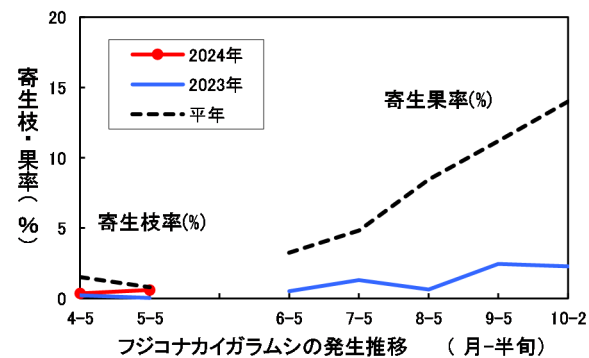
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹上での第1世代幼虫の孵化時期を確認し、約10日間隔で2回防除を実施する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

ウ 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する。



3 ハマキムシ類

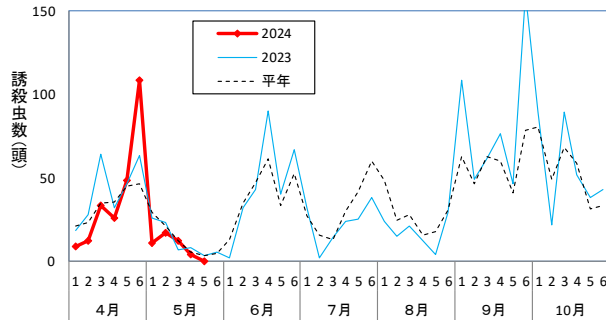
(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

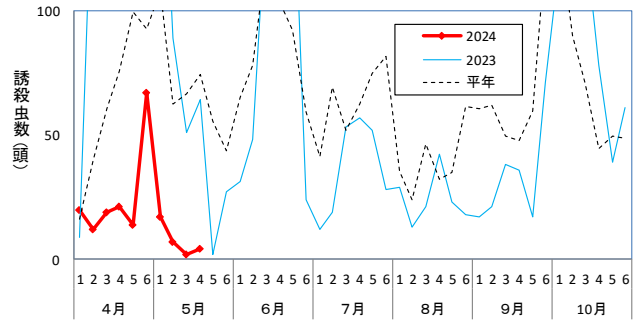
(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるチャノコカクモンハマキとチャハマキの誘殺数は下記のとおり、地域差はあるが概ね平年並であった（±）。

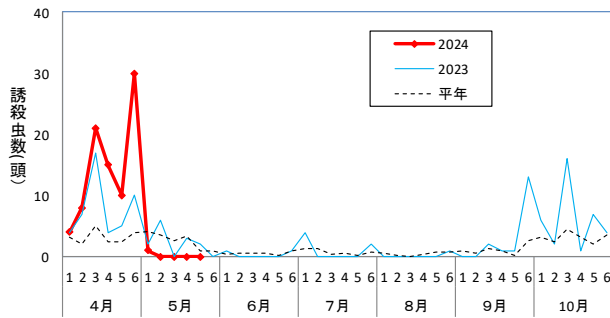
誘殺数	チャノコカクモンハマキ	<うきは市>	280頭（平年 272頭、前年 315頭）
		<八女市>	183頭（平年 696頭、前年 1,416頭）
誘殺数	チャハマキ	<うきは市>	89頭（平年 33頭、前年 58頭）
		<八女市>	26頭（平年 93頭、前年 30頭）



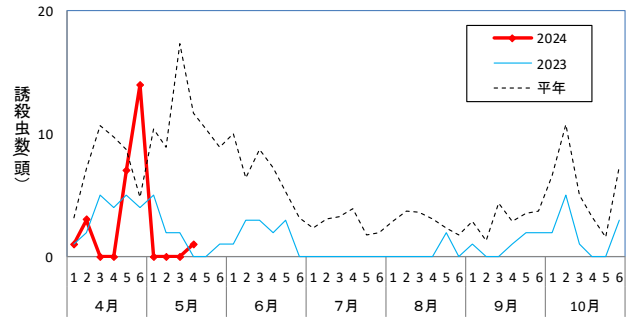
チャノコカクモンハマキ(うきは市)



チャノコカクモンハマキ (八女市)



チャハマキ (うきは市)



チャハマキ (八女市)

ハマキムシ類のフェロモントラップによる誘殺数

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャノコカクモンハマキとチャハマキの第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中～下旬頃である。ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除する。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分な薬量を丁寧に散布する。

【果樹共通：果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ）】

(1) 予報の内容

発生量：前年より多。直近の前期型発生であった2018年より多。

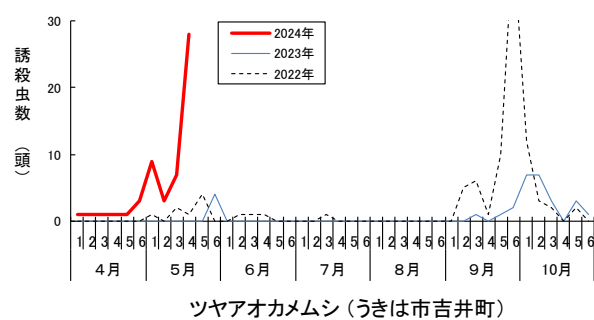
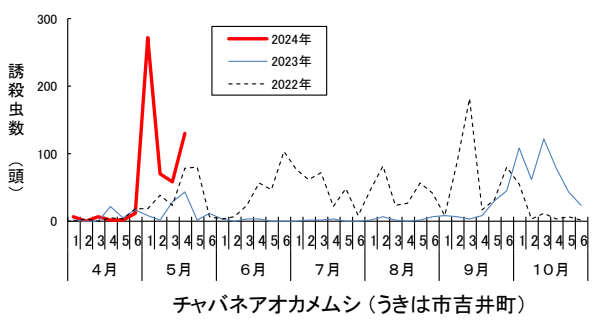
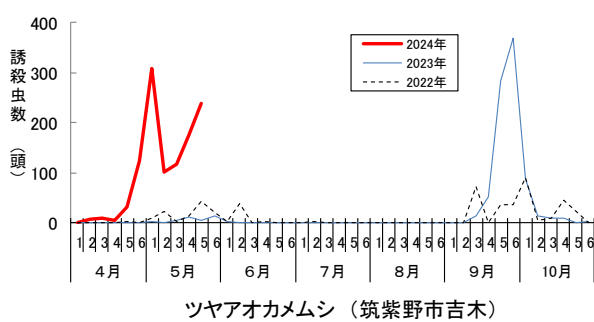
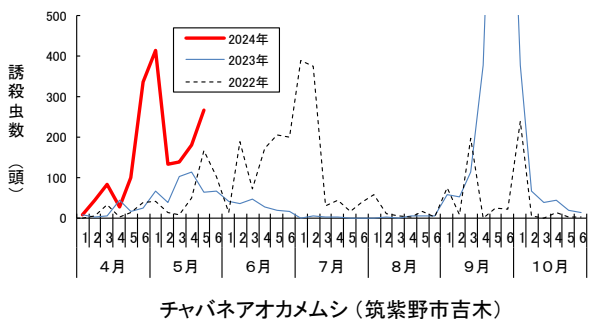
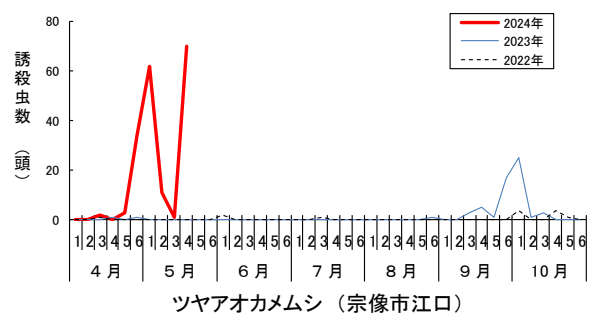
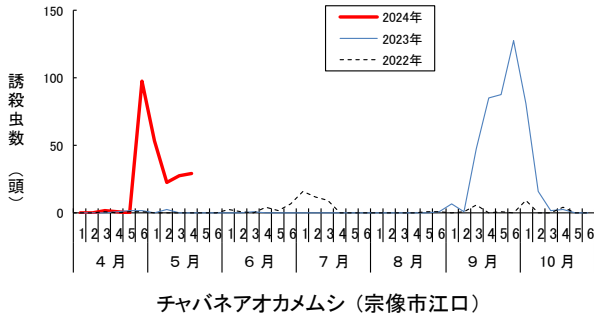
(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるチャバネアオカメムシの誘殺数は、前年及び直近の前期型発生であった2018年より多い（+）。

誘殺数	<宗像市>	235頭（前年 8頭、2018年 134頭）
	<筑紫野市>	1,895頭（前年 634頭、2018年 860頭）
	<うきは市>	557頭（前年 124頭、2018年 165頭）

イ 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるツヤアオカメムシの誘殺数は、前年及び直近の前期型発生であった2018年より多い(+)。

誘殺数 <宗像市> 183頭(前年 2頭、2018年 11頭)
 <筑紫野市> 909頭(前年 85頭、2018年 567頭)
 <うきは市> 55頭(前年 0頭、2018年 24頭)



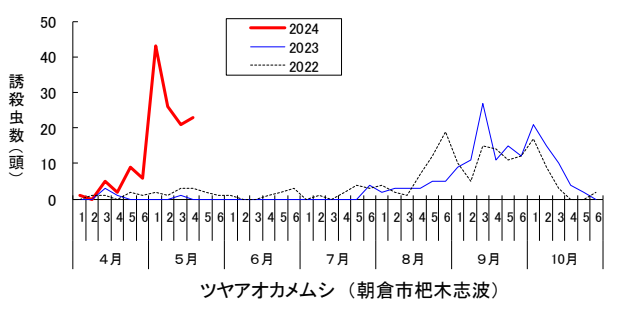
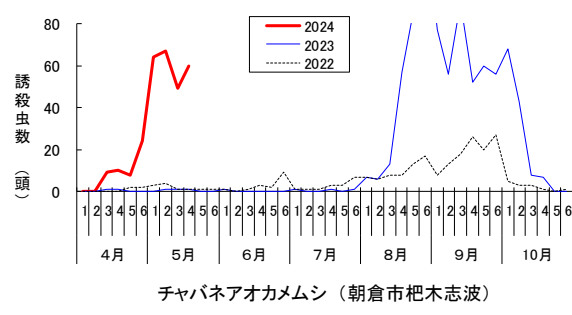
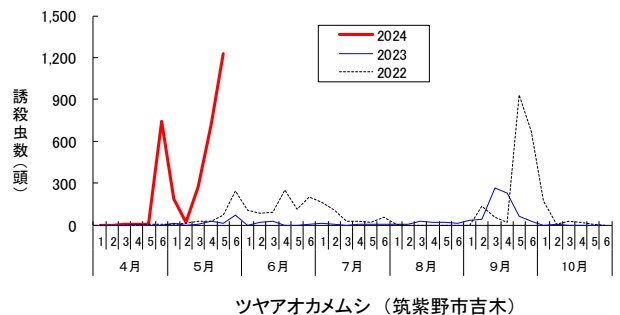
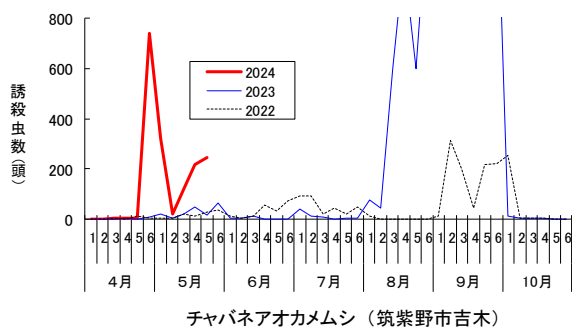
フェロモントラップにおける果樹カメムシの誘殺数

ウ 4月1半旬～5月4半旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺数は、地域差は大きいですが、前年及び直近の前期型発生であった2018年と比較して、平年並～多である(±～+)。

誘殺数 <久留米市> 130頭(前年 65頭、2018年 302頭)
 <飯塚市> 41頭(前年 112頭、2018年 712頭)
 <筑紫野市> 1433頭(前年 100頭、2018年 94頭)
 <うきは市> 0頭(前年 7頭、2018年 15頭)
 <朝倉市> 291頭(前年 5頭、2018年 116頭)

エ 4月1半旬～5月4半旬までの予察灯によるツヤアオカメムシの誘殺数は、地域差は大きいですが、前年より多く、直近の前期型発生であった2018年と比較して、やや少～多である(+)。

誘殺数 <久留米市> 13頭(前年 44頭、2018年 328頭)
 <飯塚市> 22頭(前年 10頭、2018年 181頭)
 <筑紫野市> 1,971頭(前年 51頭、2018年 260頭)
 <うきは市> 1頭(前年 1頭、2018年 1頭)
 <朝倉市> 139頭(前年 5頭、2018年 203頭)



予察灯における果樹カメムシの誘殺数

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類は夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と、予察灯やフェロモントラップでの誘殺数が増加する時期と量に留意し、果樹園への飛来状況の把握に努める。

発生時期や発生量は地域や園によって大きく異なるため、把握のための観察は一部の樹だけではなく、園全体の樹について行う。

イ ウメ・ビワ・モモ・ナシなど春季に結実する果樹については、例年より早く被害が発生する恐れがあるため、飛来状況を確認し、防除や袋掛け作業を徹底する。また、果樹カメムシ類は広範囲に移動することから、薬剤散布は広域で一斉防除を実施することで、高い防除効果が期待される。

ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ (<https://www.jpnn.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった (+)。

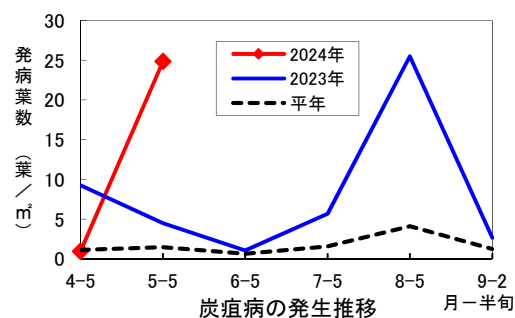
発病葉数 24.9 葉/m²
(平年 1.5 葉/m²、前年 4.5 葉/m²)

発病ほ場率 87.5% (平年 58.8%、前年 75.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている (±~+)。

(3) 防除上の注意

ア 雨滴により孢子が飛散伝搬するため降雨が多い6~9月に発生が増加することから、防除は降雨前日までに実施する。



2 もち病

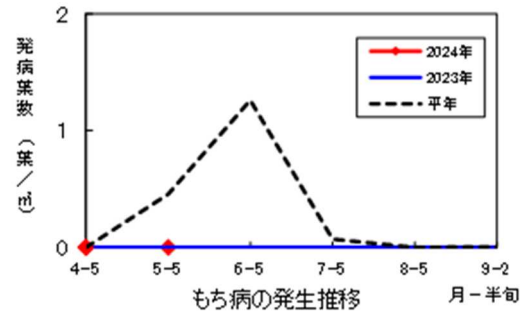
(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった (-)。

- 発病葉数 0葉/m² (平年 0.5葉/m²、前年 0葉/m²)
 発病ほ場率 0% (平年 8.2%、前年 0%)
 イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。



(3) 防除上の注意

- ア 6~7月に降雨が多く、多湿の場合に発病しやすい。摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽期に他の病害虫との同時防除を行う。

3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

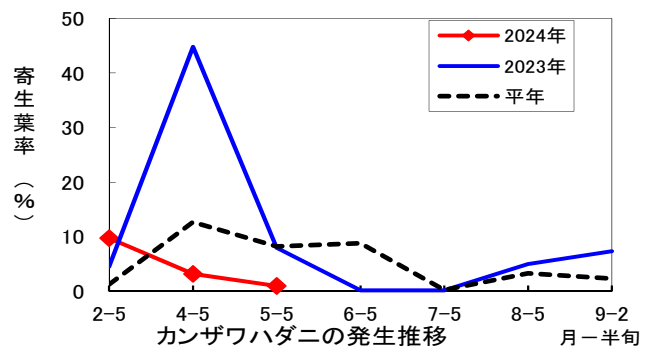
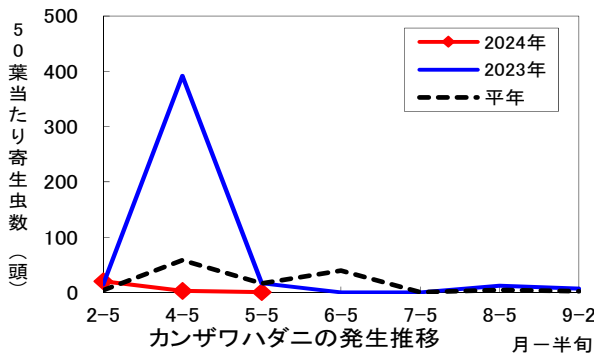
(2) 予報の根拠

- ア 5月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(−~±)。
 50葉当たり虫数 0.5頭 (平年 16.5頭、前年 16.6頭)
 寄生葉率 1.0% (平年 8.2%、前年 8.0%)
 発生ほ場率 37.5% (平年 54.7%、前年 100.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(−~±)。

(3) 防除上の注意

- ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月5半月調査の結果、ほ場での発生量は平年並であった(±)。
 巻葉数 0.04葉/m²
 (平年 0.06葉/m²、前年 0.08葉/m²)
 発生ほ場率 12.5% (平年 11.3%、前年 12.5%)

イ 4月1半月~5月4半月までのフェロモントラップによる誘殺虫数は、平年よりやや少なかった(−~±)。

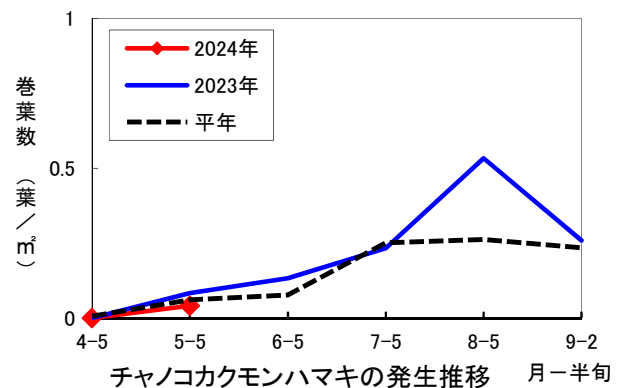
誘殺数 <うきは市> 280頭 (平年 272頭、前年 315頭)

<八女市> 177頭 (平年 696頭、前年 1416頭) グラフはp5参照

ウ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(−~±)。

(3) 防除上の注意

- ア 第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中~下旬頃である。ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。
 イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が確認されたら、直ちに防除を行う。



5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

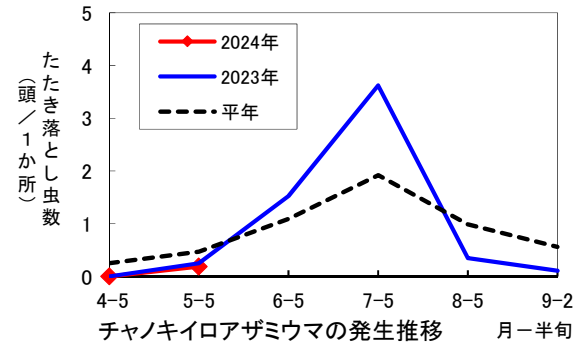
たたき落とし虫数 0.2頭(平年 0.5頭、前年 0.3頭)

発生ほ場率 25.0%(平年 46.5%、前年 50.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(ー～±)。

(3) 防除上の注意

ア 発生量は5月中旬から増加し、6～7月に最も多くなるので、B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



6 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 1.3%(平年 1.7%、前年 0.3%)

発生ほ場率 25.0%(平年 33.5%、前年 12.5%)

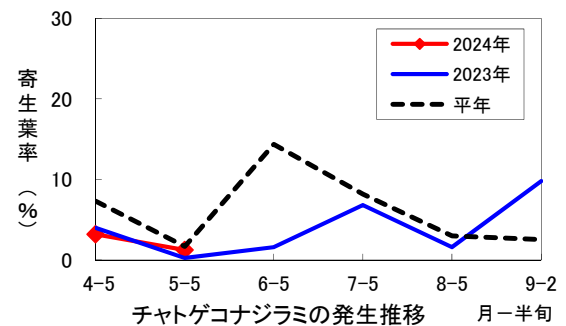
イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(ー～±)。

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は若齢幼虫発生期で、第一世代幼虫の防除適期は、山間地では5月下旬～6月上旬頃

(平坦～中山間地では5月中～下旬頃)であるため、成虫の発生状況をよく観察し発生がほとんど見られなくなった頃から、他の病害虫との同時防除を徹底する。

イ 農薬の散布にあたっては、葉裏や裾葉に薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。



7 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

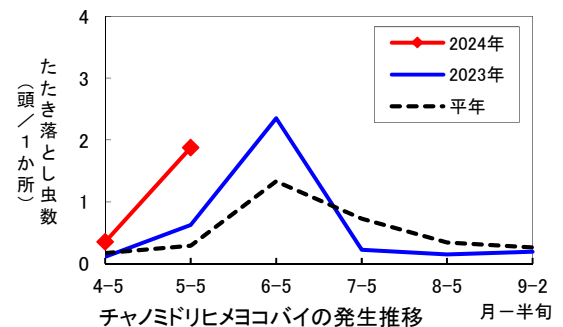
たたき落とし虫数 1.9頭(平年 0.3頭、前年 0.6頭)

発生ほ場率 87.5%(平年 41.7%、前年 75.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(ー～±)。

(3) 防除上の注意

ア 二番茶期の発生状況に注意し、B5判板上への10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。使用者の安全はもちろん、周囲の人畜・隣接作物・河川等への配慮についてもご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。